待っていてくれた秋明菊

鳴海　風

岡山道、賀陽インターを降りて国道四八四号線を走ると、懐かしいほどひなびた景色が次々に現れる。標高がけっこうあるせいか、十月だというのにもう秋色に染まりかけている。アップダウンを繰り返し、まもなく大久保峠にさしかかった。展望台があったので、岡山駅で借りたレンタカーを止めた。眼下に高梁市の町並みが広がっている。目的地である備中松山城のある臥牛山ははるか遠く、裾野に薄く霧をまとっていた。

ループ橋を下って、最初のT字路を右に折れる。片側二車線の広い通りは国道一八〇号線だ。左側には瓦を乗せた白壁の塀がどこまでも続いている。塀の向こうは高梁川だ。右側はJR伯備線の西側に沿うように市街地が延びている。備中松山藩の城下町だったところだ。

私にとって初めての文庫書き下ろし『美しき魔方陣』の主人公は、久留島義太という。実在の和算家（江戸時代の数学者）で、関孝和、建部賢弘と並び称される天才だ。天才数学者というと、奇人・変人を連想しがちだが、過去も現在もそういった数学者ばかりではない。これまで私は、できるだけ我々と等身大の和算家を描いてきた。本人の努力や時代の流れに乗って、大きな業績を残した人々だ。しかし、この久留島義太は、明らかに普通の人間ではなかったようだ。

ところで、数学者だけでなく、一般の数学愛好者も、数学の問題や解答を見て「美しい」とか「エレガント（優美な）」という言葉をよく使う。和算家も例外ではなかった。彼らは、問題や解答の「美しさ」を競っていた。

数学を「美」という観点でとらえる、数学者の感性は興味深いが、どのように表現したらいいかずっと思いあぐねていた。そのとき、この「美」という感性とは対極に位置付けられる、天才和算家久留島義太が、私の脳裏に浮かび上がった。

そもそも義太には師がなく、『塵劫記』という和算入門書を読んだだけで奥義を理解してしまい、他人に教えるほどになったという。大酒飲みで、着ている物から門人が持参した米まで酒に換えて飲んでいた。やもめの浪人なのに、妻帯も仕官もする気がなかった。西洋の数学者よりも早い発見をするなど、数学的な業績には目を見張るものがあったが、自らそれを記録に残すことをしなかった。彼の偉大な業績はすべて門人たちが伝えたのだ。

一方で義太には、久留島喜内という名前で残した詰将棋の作品が多くある。曲詰といって、詰め上がりの形が、市松模様に駒が並んでいたり左右対称になっていたりする。数学者の「美」に対する感性を、義太を通じてなら描けるのではないかと思うようになった。

桝目の中に数字を並べ、縦・横・斜めに並ぶ数字の和がすべて等しいものを魔方陣と呼ぶ。完全な秩序は「美」の一種だろう。魔方陣の作り方も数学のテーマで、和算家もそれに取り組んだ。義太には、平面上どころか立体的に積み上げた魔方陣があって、『美しき魔方陣』というタイトルはそこから来ている。

久留島義太の父、村上佐助は備中松山藩士だった。元禄六年（一六九三）、藩主水谷勝美が跡継ぎなく他界したため、お家は断絶した。幕府の命令でその城を受け取り、約一年に渡って城番を勤めたのが、忠臣蔵で有名な赤穂藩の家老大石内蔵助だった。その内蔵助が反対に城を明け渡す側に回ってしまうのは、それから八年後のことだ。武士の世界の無常観は、若き義太に強烈な印象を残したのではないだろうか。奔放で無欲な義太の人間形成の原点が、水谷家や浅野家の断絶にあるような気がしてならない。

備中松山藩は、水谷勝隆、勝宗、勝美と三代で、経済、文化共に著しく繁栄した。荒れ果てていた天然の要害、備中松山城が美しく蘇ったのもその時代だ。

天守閣は標高四三〇メートルの頂上にある。藩主は普段は麓にある御根小屋という役所で政務をとっていた。しかし、お城は家臣の心の支えであり誇りだった。秋になると、天守閣を支える石垣の表面に、鮮やかな赤や紅色の秋明菊が咲き乱れるという。秋明菊は、別名貴船菊、秋牡丹とも言って、季語にも使われている。冬を迎えて殺風景になる本丸を、秋明菊で彩を添え、藩主の心を慰めようとした家臣の思いやりではないだろうか。暖かな家中をしのばせる名残だと思った。

浪人してその城に別れを告げ、城下を去って行く家臣らの無念は想像に難くない。村上佐助一家が城下を去るとき、久留島義太は子供だったと思う（生年は不詳）。備中松山で暮らした思い出に、一家がお城に登った場面を描きたかった。できれば秋明菊が咲く頃の。

上谷川に沿う狭い道を慎重に走って、城見橋公園にレンタカーを置いた。ここからお城まで歩くと一時間かかるという。有料のワゴン車に乗せてもらい、片側が断崖の岨道を登った先が鞴峠で、そこから天守閣までまだ七〇〇メートルの坂道が残っていた。

やっと都合をつけてやって来た私の本当の目的は、秋明菊を見ることだった。落ち葉で覆われた山肌の小道は、左右からびっしりと枝がさしかわしている。苔むす石段にはどんぐりや栗のいがが落ちている。秋色濃く花一輪目に入らない。山頂の天守閣に咲く秋明菊への期待は急速にしぼんでいた。

大手門跡に着いた。既に汗びっしょりである。自然石を積んだ城塁を巡りながら、三の丸、厩曲輪、二の丸と進み、ようやく本丸の入り口南御門を潜った。はやる気持ちを抑えながら、私はまっすぐ天守閣に近付いた。

すると、まるで私を待っていてくれたように、石垣の上に秋明菊が無数の花弁を広げて私を迎えてくれたのである。

備中松山城とその城下町を詠んだ、与謝野寛、晶子夫妻の歌が残っている。

松山の渓を埋むるあさ霧に
わが立つ城の四方しろくなる　寛

高梁を霧のまばらに巻くものか
山の都をかざるけしきに　晶子

（了）